

第1章

キャリア教育とは何か

第1節 キャリア教育の必要性と意義

1 キャリア教育が提唱された背景

キャリア教育の重要性が叫ばれるようになった背景には、20世紀後半におきた地球規模の情報技術革新に起因する社会経済・産業的環境の国際化、グローバルゼーションがある。その影響は日本の産業・職業界に構造的変革をもたらしたことにとどまらず、我々の日常生活にも大きな影響を及ぼしたことは周知のことである。キャリア教育導入の背景を考える上では、このような社会環境の変化が、子どもたちの成育環境を変化させたと同時に子どもたちの将来にも多大な影響を与えたことを認識することが重要である。情報技術革新は、子どもたちの成長・発達にまで及び、さらに教育の目標、教育環境にも大きな影響を与え始めている。

こうしたことを踏まえて、子どもたちをめぐる課題やキャリア教育が提唱された経緯について考えてみたい。

(1) 子どもたちをめぐる課題

子どもたちが育つ社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等は、子どもたち自らの将来のとらえ方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている。

また、環境の変化は、子どもたちの心身の発達にも影響を与え始めている。例えば、身体的には早熟傾向にあるが、精神的・社会的側面の発達はそれに伴っておらず遅れがちであるなど、全人的発達がバランス良く促進されにくくなっている。具体的には、人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない、といった子どもの増加などがこれまでも指摘されてきたところである。

とどまることなく変化する社会の中で、子どもたちが希望をもって、自立的に自分の未来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのためには、日常の教育活動を通して、学ぶ面白さや学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である。子どもたちが、未知の知識や体験に関心を持ち、仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで、生涯にわたって学び続ける意欲を維持する基盤をつくることができる。また、多くの学校で実践されている自然体験や社会体験等の体験活動は、他者の存在の意義を認識し、社会への関心を高めたり社会との関係を学んだりする機会となり、将来の社会人としての基盤づくりともなる。さらに、子どもたちが将来自立した社会人となるための基盤をつくるためには、学校の努力だけではなく、子どもたちにかかわる家庭・地域が学校と連携して、同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。

今、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会の激しい変化に流されることなく、それぞれが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人として自立していくことができるようにする教育が強く求められている。

キャリア教育が必要となった背景と課題

情報化・グローバル化・少子高齢化・消費社会等

学校から社会への移行をめぐる課題

- ① 社会環境の変化
 - ・新規学卒者に対する求人状況の変化
 - ・求職希望者と求人希望との不適合の拡大
 - ・雇用システムの変化
- ② 若者自身の資質等をめぐる課題
 - ・勤労観、職業観の未熟さと確立の遅れ
 - ・社会人、職業人としての基礎的資質・能力の発達の遅れ
 - ・社会の一員としての経験不足と社会人としての意識の未発達傾向

子どもたちの生活・意識の変容

- ① 子どもたちの成長・発達上の課題
 - ・身体的な早熟傾向に比して、精神的・社会的自立が遅れる傾向
 - ・生活体験・社会体験等の機会の喪失
- ② 高学歴社会における進路の未決定傾向
 - ・職業について考えることや、職業の選択、決定を先送りにする傾向の高まり
 - ・自立的な進路選択や将来計画が希薄なまま、進学、就職する者の増加



学校教育に求められている姿

「生きる力」の育成

～確かな学力、豊かな人間性、健康・体力～

社会人として自立した人を育てる観点から

- ・学校の学習と社会とを関連付けた教育
- ・生涯にわたって学び続ける意欲の向上
- ・社会人としての基礎的資質・能力の育成
- ・自然体験、社会体験等の充実
- ・発達に応じた指導の継続性
- ・家庭・地域と連携した教育



キャリア教育の推進

(2) キャリア教育の提唱と経緯

① キャリア教育の登場

我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであった。同審議会は「キャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」とし、さらに「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、各学校ごとに目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と提言している。

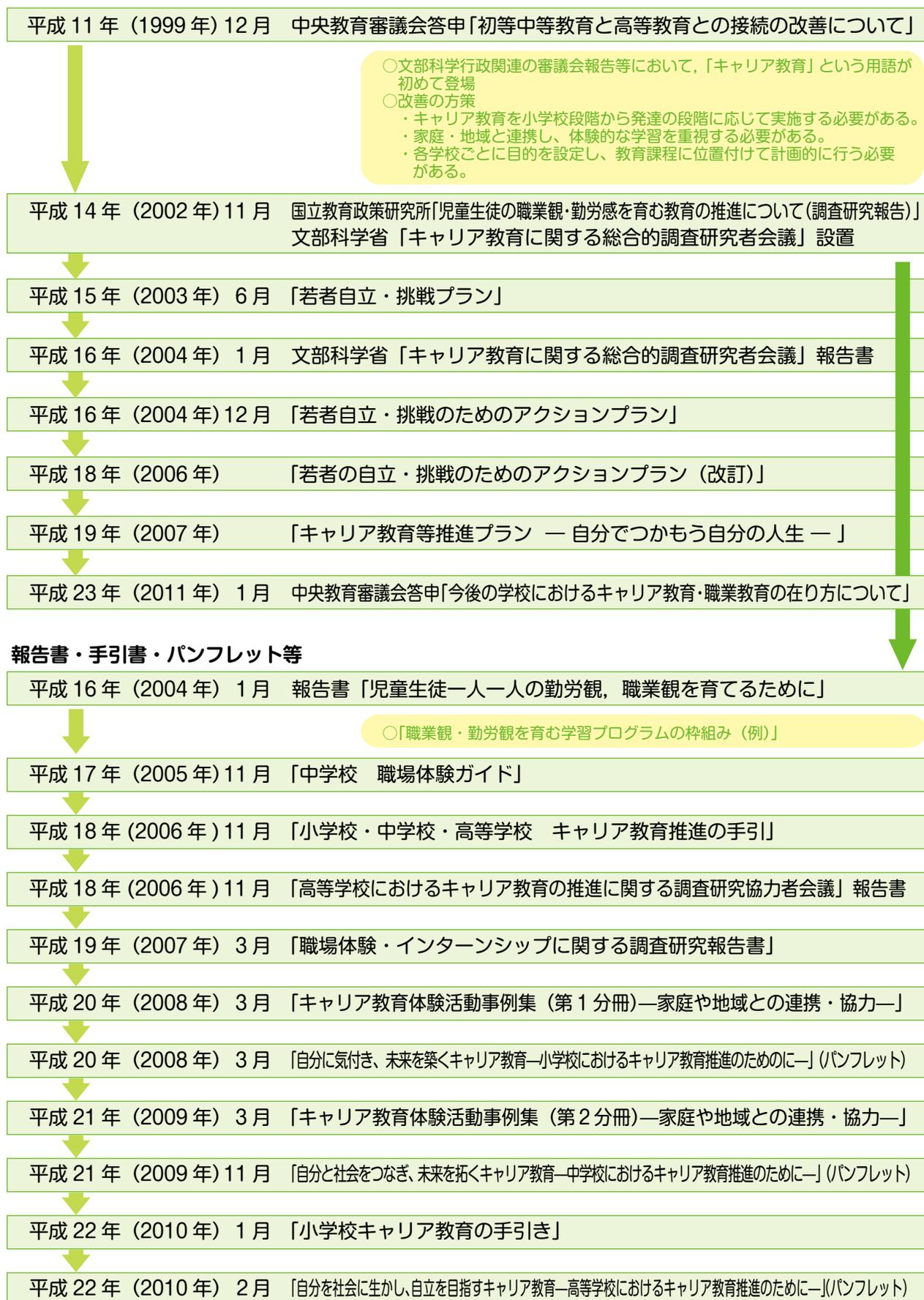
この答申を受け、キャリア教育に関する調査研究が進められ、平成14年11月には、国立教育政策研究所生徒指導研究センターが「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)」を報告した。同調査研究報告書は、子どもたちの進路・発達をめぐる環境の変化について、数々のデータを基に分析し、「職業観・勤労観の育成が不可欠な『時代』を迎えた」とし、さらに、学校段階における職業的(進路)発達課題について解説するとともに、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」を示した。

一方、学校における教育活動が、ともすれば「生きること」や「働くこと」と疎遠になったり、十分な取組が行われてこなかったりしたのではないかとの指摘も踏まえ、同年、文部科学省内に「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」を設置し、平成16年1月には、その報告書「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」を発表した。

この間、国は、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣の関係4閣僚による「若者自立・挑戦戦略会議」が、平成15年6月に「若者自立・挑戦プラン」を策定し、目指すべき社会として、「若者が自らの可能性を高め、挑戦し、活躍できる夢のある社会」と「生涯にわたり、自立的な能力向上・発揮ができ、やり直しがきく社会」をあげ、政府、地方自治体、教育界、産業界が一体となった取組が必要であるとした。キャリア教育の推進は、その重要な柱として位置付けられた。その後平成18年には、内閣官房長官、農林水産大臣、少子化・男女共同参画担当大臣も加え、「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン(改訂)」が策定され、キャリア教育のさらなる充実を図ることとした。



主なキャリア教育推進施策の展開



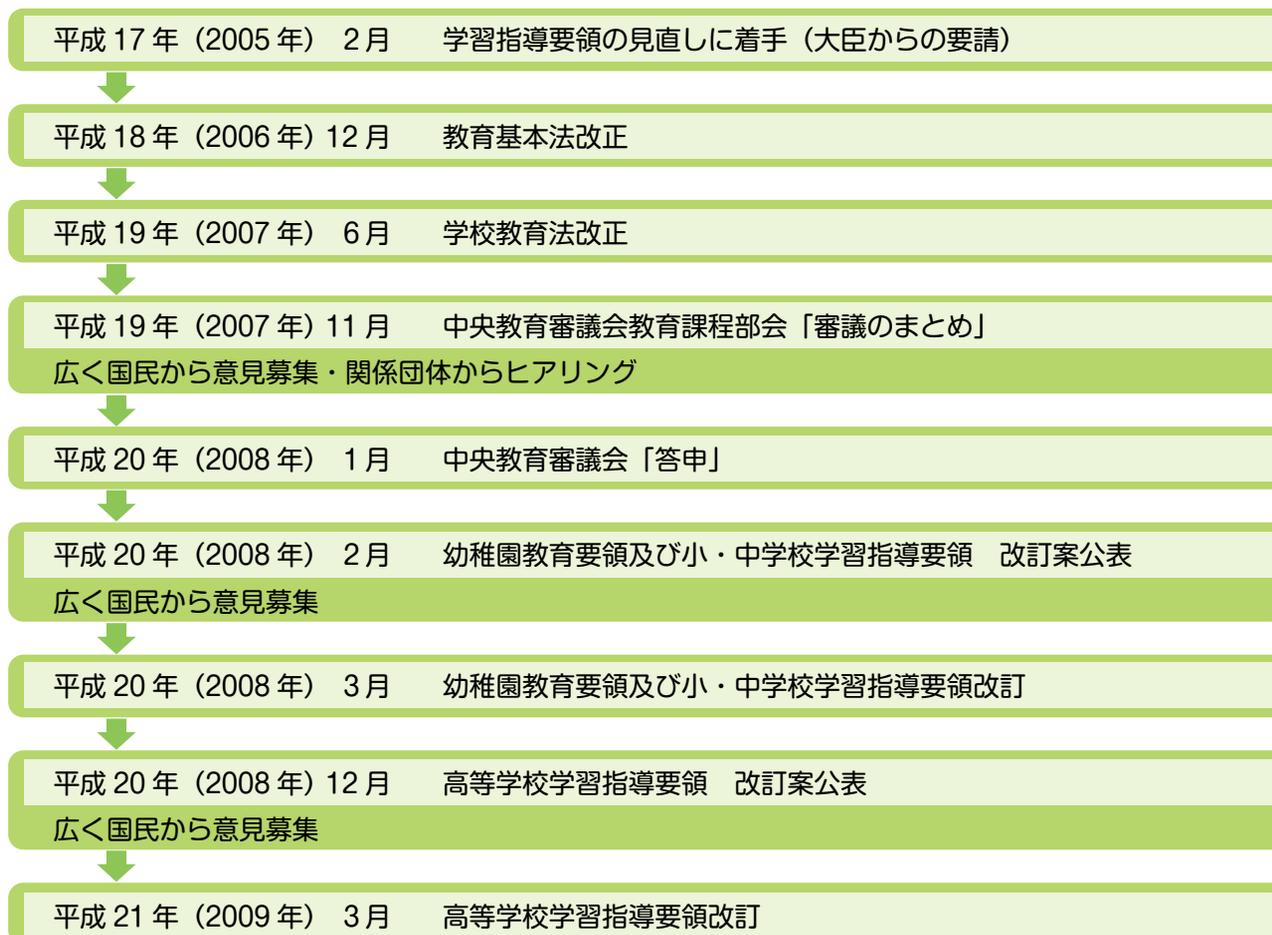
② 学習指導要領改訂までの経緯

こうした経緯を踏まえ、平成18年12月に改正された教育基本法では、第2条(教育の目標)第2号において「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと」が規定された。また、同法第5条(義務教育)第2項では「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする」と定められた。

さらに、翌年、平成19年には、学校教育法第21条(義務教育の目標)において、第1号「学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」、第4号「家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養うこと」、第10号「職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」が定められ、これらが、今日、キャリア教育を推進する上での法的根拠となっている。

また、文部科学省は、平成17年から学習指導要領の改訂作業を進め、国民からの意見聴取を経て、平成20年3月、幼稚園教育要領と小・中学校学習指導要領を公示した。新学習指導要領の中では、随所にキャリア教育が目指す目標や内容を盛り込んでいる。(p.70～参照)

学習指導要領改訂までの主な経緯



2 キャリア教育の定義

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、
キャリア発達を促す教育

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

キャリア教育は、子ども・若者がキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけである。そして、キャリアの形成にとって重要なのは、自らの力で生き方を選択していくことができるよう必要な能力や態度を身に付けることにある。したがって、キャリア教育は、子ども・若者一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な能力や態度を育てることを目指すものである。自分が自分として生きるために、「学び続けたい」「働き続けたい」と強く願い、それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子ども・若者の姿なのである。

これらのことをふまえ、平成23年に中央教育審議会はキャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義した。中央教育審議会はこの定義を提示した理由を次のように述べている。これには留意する必要がある。

キャリア教育の必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まってきており、実際の成果も徐々に上がっている。

しかしながら、「新しい教育活動を指すものではない」としてきたことにより、従来の教育活動のままでよいと誤解されたり、「体験活動が重要」という側面のみをとらえて、職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向が指摘されるなど、一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準には、ばらつきのあることも課題としてうかがえる。

このような状況の背景には、キャリア教育のとらえ方が変化してきた経緯が十分に整理されてこなかったことも一因となっていると考えられる。このため、今後、上述のようなキャリア教育の本来の理念に立ち返った理解を共有していくことが重要である。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

上に指摘される「キャリア教育のとらえ方が変化してきた経緯」についての同答申の説明は、以下の通りである。

中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」(平成11年)では、キャリア教育を「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」とし、進路を選択することにより重点が置かれていると解釈された。また、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書(平成16年)では、キャリア教育を「『キャリア』概念に基づき『児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育』」ととらえ、「端的には」という限定付きながら「勤労観・職業観を育てる教育」としたこともあり、勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、現時点においては

社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっていることが課題として生じている。

無論、勤労観・職業観が十分に形成されていないことは様々に指摘されており、一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度の育成を目指す体系的なキャリア教育を通して、勤労観・職業観をはじめとする価値観を形成・確立できるよう働きかけていくことは極めて重要である。しかし、これまでのキャリア教育においては、勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られ、平成11年の中央教育審議会答申以降、継続的に求められてきた能力や態度の育成がやや軽視されてしまっていたことは見過ごされるべきではないだろう。今日、キャリア教育の本来の理念に立ち返った理解が強く求められている。

また、キャリア教育を理解するためには、上に示した定義における「キャリア」「キャリア発達」についての正しい理解もまた不可欠である。

(1) キャリアとは

人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。

人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。

このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

これまで「キャリア」(career)という言葉は、それぞれの時代や立場、用いられる場面等によって極めて多様に用いられてきた。そのこともあって、キャリアという言葉が登場した当初は、様々な異なる見解を生む一つの要因となり、キャリア教育についての正確な理解がなかなか進みにくかった。したがって、「キャリア」の意味を共通に確認しておくことは重要である。

「キャリア」の語源は、中世ラテン語の「車道」を起源とし、英語で、競馬場や競技場のコースやトラック(行路、足跡)を意味するものであった。そこから、人がたどる行路やその足跡、経歴、遍歴なども意味するようになった。しかし、20世紀後半の産業構造の新たな変革期を迎え、「キャリア」は、特定の職業や組織の中での働き方にとどまらず、広く「働くこととのかかわりを通しての個人の体験のつながりとしての生き様」を指すようになった。

本『手引き』では、「キャリア教育」の「キャリア」を「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」ととらえることとする。

人は、誕生から老年期に至るまで、それぞれの環境の中で生きていく。その際、乳幼児であっても、青年であっても、その時々、その場面場面で、立場や役割が与えられている。例えば、中学生は、親から見た子どもであり、中学校に通う生徒であり、友達と遊ぶ余暇人でもある。さらに成長すれば、労働

者となり、家庭を築く家庭人となる。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながらその役割に取り組んでいる。人は、このような自分の役割を果たして活動することを通して、他者や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」の総体を「キャリア」ととらえるのである。

この「キャリア」の概念については、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(平成16年1月28日)が、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」と解説していたが、ここで述べられている「キャリア」と、本『手引き』で用いる「キャリア」とは、本質的に同じ概念である。

また、「働くこと」については、職業生活以外にも家事や学校での係活動、あるいは、ボランティア活動などの多様な活動があることなどから、個人がその学校生活、職業生活、家庭生活、市民生活等の生活の中で経験する様々な立場や役割を遂行する活動として、幅広くとらえる必要がある。



(2)キャリア発達とは

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を「キャリア発達」という。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

子どもの心と体は、発達の階段を一步一步上っていきながら成長していく。そうした発達過程にある子どもたち一人一人が、それぞれの段階に応じて、適切に自己と働くこととの関係付けを行い、自立的に自己の人生を方向付けていく過程、言い換えると「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」が「キャリア発達」である。具体的には、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくことがキャリア発達の過程ととらえていい。

D.E.スーパースは、このキャリア発達の過程を、生涯における役割の分化と統合の過程として示している。(p.32参照)

人の成長・発達の過程には、節目となる発達の段階があり、それぞれの発達の段階において克服あ

るいは達成すべき課題がある。それと同様に、キャリア発達にも、幾つかの段階があり、各段階で取り組まなければならない課題がある。

人は、自己実現、自己の確立に向けて、社会とかかわりながら生きようとする。そして、各時期にふさわしいそれぞれのキャリア発達の課題を達成していく。このことが、生涯を通じてのキャリア発達となるのである。キャリア教育は、そのような一人一人のキャリア発達を支援するものでなければならない。

また、キャリア発達は、知的、身体的、情緒的、社会的発達とともに促進される。例えば、中学生は中学生のものの見方や行動の仕方に基づいて、自己と社会の関係をとらえ、自分を方向付けようとする。その意味で、キャリアの発達の理解には、まず「一人一人の能力や態度、資質は段階をおって育成される」ということを理解しておく必要がある。

このことを踏まえ、国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、「職業観・勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組み(例)」を開発し、キャリア発達を促す視点に立って、将来自立した人として生きていくために必要な具体的な能力や態度を構造化し、例として示した。(p.18参照)

同学習プログラムでは、その枠組みの基本的な軸として、「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」の4つの能力領域をあげている。これらが開発された詳しい経緯については是非コラムを参照されたい。(p.20参照)

この枠組みは、一定の普遍性をもつように開発されたものであるが、あくまで一つの例であって、そこに示された4領域8能力を育成しなければキャリア発達を促すことはできないというものではない。実際に、これらの能力は、互いに関連しており、重なりや重み付けの程度も異なることから、明確に独立して存在するものではなく、必要な能力や態度は、各学校において、子どもたちの実態を把握した上で育てたい力として設定することが望ましい。生徒の実態や学校・地域の課題等によっては、これらの能力以外にも必要な能力があるだろうし、くくり方を変えた表し方も出てくるだろう。それゆえ、「職業観・勤労観をはぐくむ学習プログラムの枠組み(例)」において、あえて「例」と明示されているのである。



職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例) — 職業的(進路)発達にかかわる諸能力の育成の視点から

		小 学 校			
		低 学 年	中 学 年	高 学 年	
職業的(進路)発達の段階		進路の探索・選択にかかわる基盤形成の時期			
○職業的(進路)発達課題(小～高等学校段階) 各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。		<ul style="list-style-type: none"> 自己及び他者への積極的関心の形成・発展 身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 			
職業的(進路)発達にかかわる諸能力		職業的(進路)発達を促すために			
領域	領域説明	能力説明			
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 友達と仲良く遊び、助け合う。 お世話になった人などに感謝し親切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のよいところを見つける。 友達の良いところを認め、励まし合う。 自分の生活を支えている人に感謝する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の長所や欠点に気付く、自分らしさを發揮する。 話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> あいさつや返事をする。 「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 自分の考えをみんなの前で話す。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 友達の気持ちや考えを理解しようとする。 友達と協力して、学習や活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 異年齢集団の活動に積極的に参加し、役割と責任を果たそうとする。
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や行き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や行き方を考えていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな職業や生き方が分かる。 分からないことを、図鑑などで調べたり、質問したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 自分に必要な情報を探る。 気付いたこと、分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力	<ul style="list-style-type: none"> 係や当番の活動に取り組む、それらの大切さが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 係や当番活動に積極的に参加する。 働くことの楽しさが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 施設・職場見学等を通して、働くことの大切さや苦労が分かる。 学んだり体験したりしたこと、生活や職業との関連を考える。
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> 社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 仕事における役割の関連性や変化に気付く。
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	<ul style="list-style-type: none"> 作業の準備や片づけをする。 決められた時間やきまりを守ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来の夢や希望を持つ。 計画づくりの必要性に気付く、作業の手順が分かる。 学習等の計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 将来のことを考える大切さが分かる。 憧れとする職業を持ち、今、しなければならぬことを考える。
意思決定能力	自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分の好きなもの、大切なものを持つ。 学校ですべてよいことと悪いことがあることが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 してはいけないことが分かる、自制する。 	<ul style="list-style-type: none"> 係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ。 教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自らの課題を設定してその解決に取り組む能力	<ul style="list-style-type: none"> 自分のことは自分でやる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 自分の力で課題を解決しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。

※太字は、「職業観・勤労観の育成」との関連が特に強いものを示す

中 学 校	高 等 学 校
現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
<ul style="list-style-type: none"> ・暫定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解の深化と自己受容 ・選択基準としての職業観・勤労観の確立 ・将来設計の立案と社会的移行の準備 ・進路の現実吟味と試行的参加
育成することが期待される具体的な能力・態度	
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 ・自分の悩みを話せる人を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばそうとする。 ・他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 ・互いに支え合い分かり合える友人を得る。
<ul style="list-style-type: none"> ・他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 ・人間関係を大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 ・リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 ・新しい環境や人間関係に適応する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意思等を的確に理解する。 ・異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に合った適切なコミュニケーションを図る。 ・リーダー・フォロアーシップを発揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 ・新しい環境や人間関係を生かす。
<ul style="list-style-type: none"> ・産業・経済等の変化に伴う職業や仕事の変化のあらましを理解する。 ・上級学校・学科等の種類や特徴及び職業に求められる資格や学習歴の概略が分かる。 ・生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・整理し活用する。 ・必要に応じて、獲得した情報に創意工夫を加え、提示、発表、発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業後の進路や職業・産業の動向について、多面的・多角的に情報を集め検討する。 ・就職後の学習の機会や上級学校卒業時の就職等に関する情報を検索する。 ・職業生活における権利・義務や責任及び職業に就く手続き・方法などが分かる。 ・調べたことなどを自分の考えを交え、各種メディアを通して発表・発信する。
<ul style="list-style-type: none"> ・将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 ・体験等を通して、勤労の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 ・係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かす。 	<ul style="list-style-type: none"> ・就業等の社会参加や上級学校での学習等に関する探索的・試行的な体験に取り組む。 ・社会規範やマナー等の必要性や意義を体験を通して理解し、習得する。 ・多様な職業観・勤労観を理解し、職業・勤労に対する理解・認識を深める。
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 ・様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校・社会において自分の果たすべき役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 ・ライフステージに応じた個人的・社会的役割や責任を理解する。 ・将来設計に基づいて、今取り組むべき学習や活動を理解する。
<ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢や職業を思い描き、自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める。 ・進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。 ・将来の進路希望に基づいて当面の目標を立て、その達成に向けて努力する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生きがい・やりがいがあり自己を生かせる生き方や進路を現実的に考える。 ・職業についての総合的・現実的な理解に基づいて将来を設計し、進路計画を立案する。 ・将来設計、進路設計の見直し再検討を行い、その実現に取り組む。
<ul style="list-style-type: none"> ・自己の個性や興味・関心等に基づいて、よりよい選択をしようとする。 ・選択の意味や判断・決定の過程、結果には責任が伴うことなどを理解する。 ・教師や保護者と相談しながら、当面の進路を選択し、その結果を受け入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・選択の基準となる自分なりの価値観、職業観・勤労観を持つ。 ・多様な選択肢の中から、自己の意思と責任で当面の進路や学習を主体的に選択する。 ・進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、実現可能性についての検討をする。
<ul style="list-style-type: none"> ・学習や進路選択の過程を振り返り、次の選択場面に生かす。 ・よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していかうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来設計、進路希望の実現を目指して、課題を設定し、その解決に取り組む。 ・自分を生かし役割を果たしていく上での様々な課題とその解決策について検討する。 ・理想と現実との葛藤経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身につける。

(国立教育政策研究所「児童生徒の職業感・勤労感を育む教育の推進について」(平成14年11月))

「キャリア発達にかかわる諸能力(例)」（4領域8能力）の開発過程について

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」では、キャリア教育推進のための方策を討議した際、「キャリア教育を理論的枠組みとする」という理念を実現するためには、「各発達段階における『能力や態度』」を明確化し、それらを獲得し、実践に移せることを目標とした学習プログラムの開発が必要であるという結論に至った。

この調査研究協力者会議に先立って国立教育政策研究所生徒指導研究センターが発表(平成14年)した「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み開発」のための研究結果の中で、一つのモデル例として提示した「4領域8能力の枠組み」が、キャリア教育の枠組みの例として取り上げられた。

キャリア教育の推進に当たっては、各学校がこの4領域8能力の枠組みを参考として、独自の『育てたい能力や態度』の枠組みを開発することが考えられる。そこで、この4領域8能力を効果的に参考とするため、これが開発された経緯を理解することは役に立つであろう。

平成8年から2年間にわたり、文部省の委託をうけ「職業教育及び進路指導に関する基礎的研究」が行われた。本研究の中の進路指導部会は、本来求められる進路指導を実践に移すために、キャリア発達能力を育成することを目標とした進路指導の構造化モデルの開発に取り掛かった。

キャリア発達の促進を目標とした教育プログラムについて、国内外の理論や実践モデル等を分析した結果、「児童生徒が発達課題を達成していくことで、一人一人がキャリア形成能力を獲得していくこと」が共通した考え方となっていることを見いだした。なかでもキャリア教育の先進国であるアメリカでは、学校教育を一貫して、段階的に発達させる能力についての研究が盛んに行われていたことが参考となった。従来の日本の進路指導では、多くの場合、生徒の発達に十分な関心が向けられないまま実践すべき課題に焦点が当てられていたため、学年ごとに系統性の薄い異なったテーマ(例えば中学校1年で自己理解、2年で職業理解、3年で決定)が設定される傾向にあり、「キャリア発達の視点で生徒の能力を育てる」という視点が乏しかった。キャリア発達の視点に立つということは、同じ能力を段階的に積み重ねることで、進路選択時点などにおいてそれらの能力を具体的な行動として生かせるように育成することを意味する。

研究会では、アメリカの代表的な能力モデルやデンマークのモデル等を研究する過程で、それらをそのまま模倣することは意味がないと結論付けた。それは社会背景・教育体系等、環境的な相違があるからである。そのため、学習プログラムの枠組みとなる具体的能力が決定された過程に焦点を当てて分析した。その上で、研究委員である小学校、中学校、高等学校、大学の教師と企業の代表者らが、海外のモデルを参考にしながら、「将来、自分の職業観・勤労観を獲得して、自立的に社会の中で生きていくために、今から育てなければならない能力や態度とは何か」について議論し、日本の学校で児童生徒のためにできることを検討して、その結果、4領域12能力を試作した。

その上で、各学校段階で従来取り組んできた様々な活動に注目し、特に小学校では社会性の育成、中学校、高等学校では主として在り方生き方の指導や進路指導の具体的な活動をできる限り網羅的に抽出した上で、それらの活動を4領域12能力の枠組みに沿って分類・整理を試みた。この作業は、4領域12能力の枠組みが実際の教育活動をとらえる上で矛盾なく機能することを確認するために行ったものである。

以上のような経緯で生まれた能力の枠組みはのちにさらに検討され、現在広く知られる4領域8能力となった。この枠組みは、一定の普遍性をもつように開発されたものであるが、児童生徒の生活環境の特徴等を考慮し、各学校で実践できる枠組みを開発するためのひとつのモデルであることを強調しておきたい。

(3) キャリア教育で育成すべき力 — 「基礎的・汎用的能力」とは—

この4領域8能力の例については、その後、「各学校においてキャリア教育を推進する際の参考として幅広く活用されることを期待したい」（「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」平成16年）と指摘されたことなどによって広く知られるようになり、単に「4領域8能力」というように「例」を省略して呼びならわされるようにもなった。その一方で、

- 高等学校までの想定にとどまっているため、生涯を通じて育成される能力という観点が薄く、社会人として実際に求められる能力との共通言語となっていない
- 提示されている能力は例示にもかかわらず、学校現場では固定的にとらえている場合が多い
- 領域や能力の説明について十分な理解がなされないまま、能力等の名称（「○○能力」というラベル）の語感や印象に依拠した実践が散見される

などの課題が指摘されてきたのである。

そのため、中央教育審議会では、「4領域8能力」をめぐるこれらの課題を克服するため、その後に提唱された類似性の高い各種の能力論（内閣府「人間力」、経済産業省「社会人基礎力」、厚生労働省「就職基礎能力」など）とともに、改めて分析を加え、「分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力」として再構成して提示することとした。

その結果得られたのが、平成23年1月にとりまとめられた「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」に示された「基礎的・汎用的能力」である。

① 基礎的・汎用的能力とは何か

「基礎的・汎用的能力」は、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される。これらの能力について、答申は次のように述べている。

- これらの能力は、包括的な能力概念であり、必要な要素をできる限り分かりやすく提示するという観点でまとめたものである。この4つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。
- これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なると考えられる。各学校においては、この4つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を通じて達成することが望まれる。その際、初等中等教育の学校では、新しい学習指導要領を踏まえて育成されるべきである。

（中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（平成23年1月31日））

これまで「4領域8能力」と呼びならわされてきた「キャリア発達に関わる諸能力（例）」も、中央教育審議会が今回提示した「基礎的・汎用的能力」も共通して、それぞれの学校・地域等の実情や、各校の児童生徒の実態を踏まえ、学校ごとに育成しようとする力の目標を定めることを前提としている点は、特に重要な特質である。

以下、それぞれの具体的な能力についての説明を答申から引用する。

◇ 人間関係形成・社会形成能力

「人間関係形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。

この能力は、社会とのかかわりの中で生活し仕事をしていく上で、基礎となる能力である。特に、価値の多様化が進む現代社会においては、性別、年齢、個性、価値観等の多様な人材が活躍しており、様々な他者を認めつつ協働していく力が必要である。また、変化の激しい今日においては、既存の社会に参画し、適応しつつ、必要であれば自ら新たな社会を創造・構築していくことが必要である。さらに、人や社会とのかかわりは、自分に必要な知識や技能、能力、態度を気付かせてくれるものでもあり、自らを育成する上でも影響を与えるものである。具体的な要素としては、例えば、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等が挙げられる。

◇ 自己理解・自己管理能力

「自己理解・自己管理能力」は、自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。

この能力は、子どもや若者の自信や自己肯定感の低さが指摘される中、「やればできる」と考えて行動できる力である。また、変化の激しい社会にあって多様な他者との協力や協働が求められている中では、自らの思考や感情を律する力や自らを研鑽する力がますます重要である。これらは、キャリア形成や人間関係形成における基盤となるものであり、とりわけ自己理解能力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある。具体的な要素としては、例えば、自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等が挙げられる。

◇ 課題対応能力

「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。

この能力は、自らが行うべきことに意欲的に取り組む上で必要なものである。また、知識基盤社会の到来やグローバル化等を踏まえ、従来の考え方や方法にとらわれずに物事を前に進めていくために必要な力である。さらに、社会の情報化に伴い、情報及び情報手段を主体的に選択し活用する力を身に付けることも重要である。具体的な要素としては、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。

◇ キャリアプランニング能力

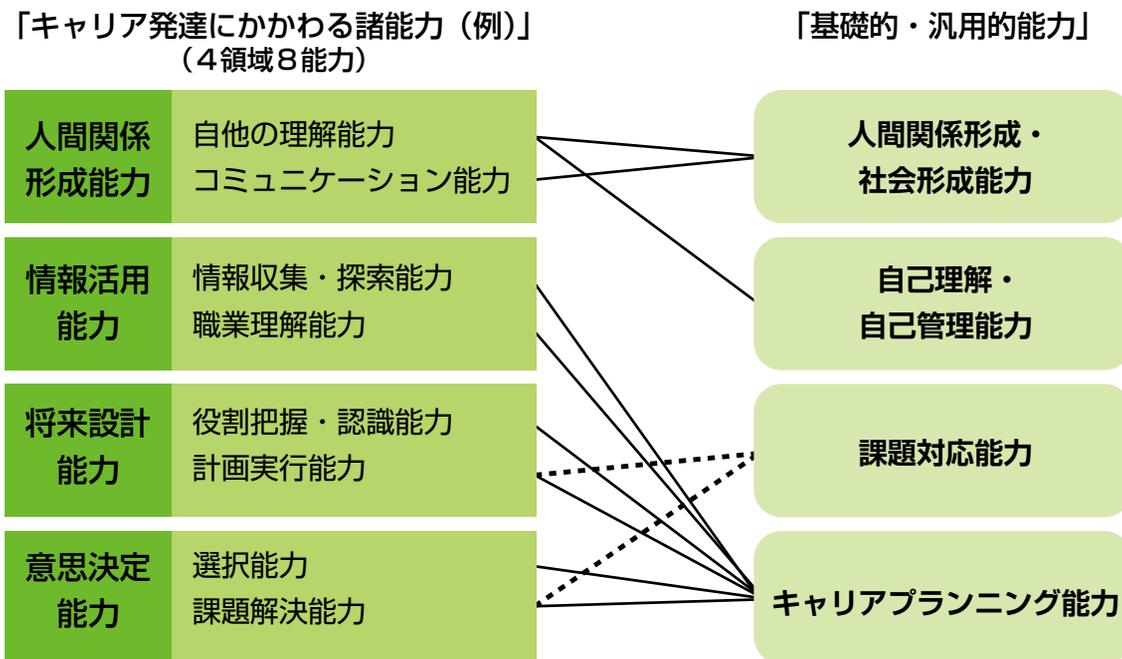
「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

この能力は、社会人・職業人として生活していくために生涯にわたって必要となる能力である。具体的な要素としては、例えば、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等が挙げられる。

② 「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換

これらの「基礎的・汎用的能力」は、「4領域8能力」をはじめとしたこれまでの諸提言を踏まえ、既に共通する要素が多く含まれているとの認識の下で、それらを再構成したものである。「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」との関係は次のように整理できる。「基礎的・汎用的能力」を全く新しい能力論の登場として理解するのではなく、「4領域8能力」をめぐる実践上の課題を克服し、よりよい実践に向けて改善を図るための枠組みととらえて活用すべきである。

しかし同時に、「4領域8能力」と「基礎的・汎用的能力」との間に見られる次のような差異にも留意する必要がある。例えば下図が示すように、「4領域8能力」では、「基礎的・汎用的能力」の重要な要素である「課題対応能力」の育成について必ずしも十分な具体性を伴って提示されてこなかった。「4領域8能力」においては、「計画実行能力(目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力)」や「課題解決能力(意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適応するとともに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力)」が求められていたものの、自らの将来の生き方や進路とのかかわりを重視した実行力や課題解決の力の育成に力点が置かれており、広く「仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力」の育成については必ずしも前面に出されてはいなかったと言える。この他、「基礎的・汎用的能力」は、「4領域8能力」においては焦点化されてこなかった「自己管理」の側面、例えば忍耐力やストレスマネジメントなども重視するものである。このように、「基礎的・汎用的能力」は「4領域・8能力」を補強し、より一層現実に即して、社会的・職業的に自立するために必要な能力を育成しようとするものであり、この点を踏まえた実践の改善が求められている。



※図中の破線は両者の関係性が相対的に見て弱いことを示している。「計画実行能力」「課題解決能力」という「ラベル」からは「課題対応能力」と密接なつながりが連想されるが、能力の説明等までを視野におさめた場合、「4領域8能力」では、「基礎的・汎用的能力」における「課題対応能力」に相当する能力について、必ずしも前面に出されてはいなかったことが分かる。

今後、各学校においては、「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換を徐々に図っていく必要がある。その際、中央教育審議会答申の次の指摘を踏まえておくべきだろう。

- キャリア教育の実践が、各機関の理念や目的、教育目標を達成し、より効果的な活動となるためには、各学校における到達目標とそれを具体化した教育プログラムの評価の項目を定め、その項目に基づいた評価を適切に行い、具体的な教育活動の改善につなげていくことが重要である。その際、到達目標は、一律に示すのではなく、子ども・若者の発達の段階やそれぞれの学校が育成しようとする能力や態度との関係、後期中等教育以降は専門分野等を踏まえて設定することが必要である。
- キャリア教育において育成する能力や態度を測る指標の作成方法や検査手法等の開発を行うことは重要であり、今後、専門的な見地から研究が行われるとともに、各学校に提示するなどの支援が行われることを期待したい。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

これを受け、国立教育政策研究所生徒指導研究センターでは、有識者等の協力を得て、「基礎的・汎用的能力」に基づくキャリア教育の計画立案と実践の評価をめぐる調査研究を進め、平成23年3月に報告書(『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書』)をとりまとめて、公表した。「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」に基づくキャリア教育への転換は、当該報告書や、文部科学省や国立教育政策研究所などが作成する説明資料(リーフレットやパンフレットなど)を参照しつつ、段階的に行うことも可能である。

各学校においては、「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換(組み換え)を焦るのではなく、まずは、自校のキャリア教育の取組を振り返り、これまで指摘されてきたような課題(p.21参照)に陥っていないかどうかの点検を進めることからスタートさせることが望ましい。特に、それぞれの学校・地域等の実情や、各校の生徒の実態を踏まえ、育成しようとする能力の到達目標を定めてきたか否かの自己点検は不可欠である。この点は、「4領域8能力」から「基礎的・汎用的能力」への転換後も各校の実践の基盤となるものであり、この基盤がおろそかのままでは、新たな枠組みへの転換を図っても実践の改善は期待できない。

(4)今後のキャリア教育における勤労観・職業観の位置付け

ここで、中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」が、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力の要素として、「基礎的・汎用的能力」のほかに、「基礎的・基本的な知識・技能」と、能力や知識・技能の基盤となる「意欲・態度及び価値観」、**「論理的思考力、創造力」**、また一定・特定の仕事を遂行するために必要な専門的知識や技能等である「**専門的な知識・技能**」などが必要であると指摘している点に注目しよう。

多くの人は、人生の中で職業人として長い時間を過ごすこととなる。職業や働くことについてどのような考えを持つのかに関することや、日常生活の中でそれぞれの役割を果たしつつ、どのような職業に就き、どのような職業生活を送るのかに関することは、人がいかに生きるのか、どのような人生を送るのかということと深くかかわっている。この意味で、一人一人が自らの勤労観・職業観の形成・確立を図ることは極めて重要である。

この点について、中央教育審議会答申は次のように述べている。

意欲や態度と関連する重要な要素として、価値観がある。価値観は、人生観や社会観、倫理観等、個人の内面にあって価値判断の基準となるものであり、価値を認めて何かをしようと思い、それを行動に移す際に意欲や態度として具体化するという関係にある。

また、価値観には、「なぜ仕事をするのか」「自分の人生の中で仕事や職業をどのように位置付けるか」など、これまでキャリア教育が育成するものとしてきた勤労観・職業観も含んでいる。子ども・若者に勤労観・職業観が十分に形成されていないことは様々に指摘されており、これらを含む価値観は、学校における道徳をはじめとした豊かな人間性の育成はもちろんのこと、様々な能力等の育成を通じて、個人の中で時間をかけて形成・確立していく必要がある。

(中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」(平成23年1月31日))

その上で、同答申は「後期中等教育修了までに、生涯にわたる多様なキャリア形成に共通した能力や態度を身に付けさせることと併せて、これらの育成を通じて価値観、とりわけ勤労観・職業観を自ら形成・確立できる子ども・若者の育成を、キャリア教育の視点から見た場合の目標とすることが重要である」と指摘しているのである。

勤労観・職業観は、勤労・職業を媒体とした人生観ともいえるべきものであって、人が職業や勤労を通してどのような生き方を選択するかの基準となり、また、その後の生活によりよく適応するための基盤となるものである。

勤労観・職業観の形成を支援していく上で重要なのは、一律に正しいとされる「勤労観・職業観」を教え込むのではなく、生徒一人一人が働く意義や目的を探究して、自分なりの勤労観・職業観を形成・確立していく過程への指導・援助をどのように行うかである。人はそれぞれ自己の置かれた状況を引き受けながら、何に重きを置いて生きていくかという自分の「生き方」と深くかかわって「勤労観・職業観」を形成していく。「生き方」が人によって様々であるように、「勤労観・職業観」も人によって様々であってよいからである。

しかしながら、今日の若者の「勤労観・職業観」に、ある種の危うさがあることを指摘する声は少なくない。職業の世界の実際を把握する機会を与えられず、自己の在り方を職業生活や社会生活とのトータルな関係で考えることができないままに、将来への希望や自信、働くことへの意欲が持てないでいる若者の姿が見られる。「自分なりの勤労観・職業観」という多様性を大切にしながらも、そこに共通する土台として、次のような「望ましさ」を備えたものを目指すことが求められる。

「望ましさ」の要件としては、理解・認識面では、

- ①職業には貴賤がないこと
- ②職務遂行には規範の遵守や責任が伴うこと
- ③どのような職業であれ、職業には生計を維持するだけでなく、それを通して自己の能力・適性を発揮し、社会の一員としての役割を果たすという意義があること

などがあげられるであろうし、情意・態度面では

- ①一人一人が自己及びその個性をかけがえのない価値あるものとする自覚
- ②自己と働くこと及びその関係についての総合的な検討を通じた、勤労・職業に対する自分なりの備え
- ③将来の夢や希望を目指して取り組もうとする意欲的な態度

などがそれに当たると考えられる。